平成８年度
特別研究費概要報告

元朝登科録復元の試み

森　田　憲　司
文学部教授

元朝による漢民族への支配についての研究の進展には、この時代に関わる個別事象についての具体的なデータの蓄積から始める必要があることについては、筆者はこれまでにも書いてきた。近世中国社会を特徴づけるものの１つである科挙に関しても、元朝でのその意義を論ずるには、積極的に見るにしろ、消極的に見るにしろ、合計18回行なわれ、1,135人の合格者を出した科挙に、誰が合格し、その後の官界における遷転はどうであったのかを知ることがまず前提となる。すなわち、元朝における科挙の１回１回について、その登第者を洗いだし、その人物についてより多くの情報を得ること、中国の伝統的な呼称を用いれば、「登科録」のより完全な復元の作業が必要なのであり、今回の特別研究費による研究は、そのための試行作業を目指したものである。

元朝の科挙合格者名簿は、元統元年と至正11年の２回の科挙のみが現存し（下のａ）、蕭啓慶氏の研究がある。当然のことながら、それ以外の16回の科挙については、個々に登第者を追跡していくしかない（延祐２年については、植松正氏による検討がある）。そのためには、どのような作業が必要となるだろうか。まず、想定される資料を列記してみる。

ａ：題名録（元統元年、1333）、題名碑（至正11年、1351）

ｂ：正史の記事（状元の名前など）

ｃ：石刻（記事、銜名）

ｄ：伝記資料（文集中の碑伝行状など）

ｅ：明清地方志の題名（選挙、歴官、人物など）

このうち、同時代史料として信頼度の高いものは、ａ、ｂ、ｃであることは言うまでもない（厳密に言えば問題なしとしないが、ここでは省略）。

また、ｄについては、すでに王德毅他編の『元人伝記資料索引』がある（以下『資料索引』と略）。ただし、『資料索引』が各項目で挙げている典拠には、例えば『古今図書集成』のように、同時代性などの点で疑問のあるものも少なくないが（本書の資料収集の態度については、先行の『宋人伝記資料索引』についての森田の書評を参照のこと）、全５巻に含まれている人物データの量は膨大であり、作業の出発点としては、まちがいなく有用である。

その一方で、『資料索引』に依拠するのみでは、質の面でも、量の面でも、作業は完全なものたりえないことも明らかである。そこで筆者が選択したのは、かねてなじみの深い材料である、明清地方志の宋元関係記事と、石刻資料の利用であった。旧中国で歴代営々として編まれ

続けてきた地方志（府州県志）の大部分には、「選挙」の項が設けられており、過去に科挙や薦辟を通じて官僚となった地域の人々のリストが作成されている。また、「人物」などの項にそうした人々についての小伝がある場合もあるし、歴代のその地域の官員のリストである「職官」の項も役に立つ場合が多い。今回は、それらの中でもとくに省志・府志といった、より広い空間を扱う地方志を対象として資料収集を試みることとした。

最近では、中国や台湾で、明清地方志について各種の影印の叢書が刊行され、史料へのアプローチの条件が緩和されつつあることも、この作業への取り組みの背景としてある。さらに、台湾の金恩輝氏主編の『中国地方志総目提要』（漢美図書有限公司　1996）が刊行されて、個々の地方志についての具体的データを一覧できるようになった。今回の研究費の支出においては、上記の「提要」のほか、可能な範囲で影印の地方志を購入し、本学の図書館に架蔵することによって、今回の研究のみならず、今後の利用にも便ならしめるようにした。その主なものとしては、『天一閣明代方志選刊続篇』（正篇は購入済み）、『日本所蔵罕見中国方志選刊』、『校点本畿輔通志』などがある。しかし、購入可能な地方志の範囲や予算には限度があるため、国内の所蔵機関に収蔵されている地方志類を閲覧調査し、そこから関係する記事を収集することが、作業の中心となった。

具体的な作業としては、まず、『資料索引』の小伝で、登第についての言及がある人物について拾い上げ、基本カードを作成したが、その結果、508名の人物を拾い出すことができた。もし、これらの人物のすべての登第が確実ならば、『元史』選挙志の科挙記事に見える元朝一代の登第者1,135名の半分弱を、すでに掌握できていることになる。もちろん、『資料索引』のデータがすべて信頼できるかどうかは、別の話である。

次に地志であるが、明清両代を通じて３種ないし４種現存する各省の通志が現存しているのが普通であるから、まずそれらを影印本もしくは複写で収集し、選挙関係記事に見える登第者名を収集した。作業は府志におよびつつある。

ところで、これらの地志はすべて明朝以降に編まれたものであり、元朝漢人研究にとっては、同時代資料とは言い難い。当然のことながら、そこに見出だされる科挙関係資料にも、少なからざる疑問点が含まれており、以下にふれるように、すでに清朝の考証学者によって指摘されている。こうしたことから、科挙登第者のリストの作成の一方で、モデルとなる地域を選んで、地方志所収の科挙関係記事の史料的性格、信頼度についての検討をおこなうこととした。

検討の対象としては江西省を選んだ。これは、明朝以来の「江西通志」における科挙関係記事の信頼性の問題について、すでに銭大昕が指摘し（『十駕斎養新録』巻14・江西通志）、さらに光緒の通志においては、銭を引用しつつ、より具体的に論じているということがあるからである。今回の研究では、国内で参照可能な江西の府州県志のほとんどについて、選挙の項に見える登第者名の調査をおこなうことができたが、いずれかの地志に登第者として名前の見える人数は298名にのぼるというのが、その結果である。これでは、蒙古色目を含めての元朝の全登第者数である1,135名の約４分の１、江南だけであれば半数を越えることになってしまう。これはあまりに非現実的な数字である。

このような事態がなぜ生じているのかについての検討と分析は、宋元時代研究への明清地志の利用全般に関わる問題であり、重要な研究課題となる。ただし、本研究では、その目的を登科録の復元に置いており、当面の作業としては、こうして得られた人物データを、基礎資料として公開することが優先すると考えるので、まず江西についての「存目表」とでも言うべきものを作成することとし、そのための詰めの作業を、継続して進めつつある。資料集的性格が強いため、校正、確認に意外に時間を要しているが、できるだけ早い公刊を目指すものである。

なお、この特別研究の成果を踏まえて、97年5月17日、京都大学文学部内陸アジア研究所で、「元代漢人知識人研究の課題二、三：石刻資料と地方志から見て」と題した講演をおこなった。

平成８年度　特別研究費Ｉ一覧表

研究代表者	所属・職名	共同研究者	研究課題
永井一彰	文学部 国文学科 教授		江戸時代の雑俳資料に見られる地方取次所の実態について —奈良・大和を中心に—
三木理史	文学部 地理学科 講師	土平　博 （地理学科・助手） 野崎　清孝 （奈良大学　名誉教授）	大和における町村絵図および文書類の調査研究
鎌田道隆	文学部 史学科 教授	安田真紀子 （奈良大学 史学科 卒業生）	近世大和を中心とする参詣旅行の接待に関する史跡および史料の調査・研究
斎藤友里子	社会学部 社会学科 講師	髙田　利武 （社会学科・教授） 遠藤　由美 （社会学科・助教授）	社会意識の国際比較分析
与謝野有紀	社会学部 社会学科 助教授	ハフシ　モハメッド （社会学科・助教授） 八ツ塚一郎 （産業社会学科・助手）	社会経済体制の変容とライフスタイルの多様化
松戸武彦	社会学部 産業社会学科 教授	矢守　克也 （社会学科・助教授）	変容する国際社会と企業組織の進展
泉　輝孝	社会学部 産業社会学科 教授		中高年者の技能の社会的通用性とその向上に関する研究
道明義弘	社会学部 産業社会学科 教授		奈良県企業の行動特性解明のための基礎的研究 —上場企業による所属産業および近畿他府県上場企業との比較—　—検証：株式会社「日本」—
高見　茂	教養部 助教授	湊　敏 （教養部・教授）	期待される高等教育機関像 —奈良地域を中心として—
横田　浩	教養部 助教授		情報化社会—特にネットワーク化・マルチメディア化に対応した情報教育について—
西山要一	文学部 文化財学科 教授	藤原　剛 （教養部・教授）	奈良における大気汚染が文化財に与える被害と、その防止に関する研究

※　一覧表掲載順序は、交付申請書の受付順。